

東書教育賞は教育現場を支援します



代表取締役社長 河内義勝

ただ今、ご紹介をいただきました東京書籍の社長をしております河内義勝と申します。今朝は大変冷え込みましたが富士山がすっきりと見えるほど素晴らしい天気になりました。この贈呈式に大変ふさわしい天候になりまして、私どももほっとしているところでございます。主催者を代表いたしましてお祝いの言葉とご挨拶を申し上げたいと思います。

まずは、このたび第23回の東書教育賞に応募され受賞されました先生方、誠におめでとうでございます。心よりお喜びを申し上げます。また、本日は大変ご多忙中にもかかわらず、この贈呈式にご出席いただきましたことを厚く御礼を申し上げる次第でございます。

昨年は参議院選挙での与野党の逆転、安倍総理の突然の辞任、そしてまた福田新総理の新たな誕生など大きな変動がございました。また、年金問題が大変な社会問題となりまして、さらに老舗による商品表示の偽装問題、防衛省の官民癒着の事件などが相次いで発覚いたしました。新年を迎えても、私ども教科書会社とも関係のある製紙会社でも商品の偽装が明るみに出るなど、日本の社会全体の品格というものが低下してしまっただけではないかという思いがいたします。

教育の問題でございますが、昨年4月に行われました全国学力学習状況調査の結果が、皆さんご存じの通り10月に公表されました。続きまして、OECDの学習到達度調査、いわゆる

PISAの結果が12月に公表されるなど、この日本の学力問題がマスコミにも多く取り上げられたところでございます。

このような状況のなかにおきまして、中央教育審議会が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」と題する答申をまとめまして、1月17日に渡海文部科学大臣に提出したところでございます。この答申を受けまして文部科学省はこの3月までに小学校、中学校の新しい学習指導要領を告示し、小学校は平成23年度から、中学校は平成24年度から完全実施される予定でございます。

また、学力問題への早急な取り組みを要望する声が大変強いということから、平成21年度からは移行措置に入り、算数、数学または理科については可能な範囲で先行して実施する方針を大臣が表明しているところでございます。今回の答申内容でございますが、教育基本法の改正と学力問題への対応がテーマになっているところでございますが、今後の日本の社会や日本人のあり方を提言した重要な内容になっているのではないかと考えております。

また、答申には新しい学習指導要領の指導体制の確立や教科書の充実といった教育条件の整備等を伴って、円滑かつ確実に実施されるよう中央教育審議会として注視するということが記載されているように、答申された内容をいかに具体

化して実行していくことが重要であり、それは社会全体の責任であると考えているところでございます。わが社を含めました教科書業界全体も大きな役割と責任を背負っております。わが社におきましても、中教審の提言でもございます質と量の両面での充実を図った教科書づくりに最大限の努力を傾注してまいりたいと決意をしているところでございます。

さて、この東書教育賞はおかげさまで、今年で23回目を迎えました。これまでも大変素晴らしい研究と実績を残されました先生方が受賞されてまいりました。今年も本日受賞されました先生方をはじめとしまして、全国から多くの素晴らしい研究論文を頂戴いたしました。

このような先生方が全国に大勢おられることが、私は日本の教育の強さであり、また原点であると考えております。東書教育賞は現場の先生方に研究論文の発表の場を提供し、すぐれた実践や研究を広く教育現場に紹介して教育の世界に貢献するという目的をもって、1984年に創

設されたものでございます。来年の2009年には私どもの社は創業100周年を迎えます。

また、東書教育賞も第25回、四半世紀という大変、記念すべき年を迎えることとなります。先生方におかれましては、今後とも引き続き東書教育賞をご支援いただきまして、また回りの先生方にも是非お声をかけてご紹介をしていただければ大変幸いですと思っております。

最後になりましたが、本日は大変お忙しいところお時間を割いていただき、第1次審査から最終審査までご指導をいただきました、今日はご都合で欠席でございますが奥田先生をはじめ、坂元先生、多くの審査員の先生方、そしてまた東京教育研究所の先生方に対しまして、この場をお借りしまして厚くお礼を申し上げる次第でございます。また本日ご出席いただいております報道関係の皆様にも感謝申し上げます。簡単ではございますが、ご挨拶に代えさせていただきます。本日はおめでとうございました。

第23回「東書教育賞」の審査を終えて

A部門審査委員長 **奥田真丈先生**

受賞されました先生方、心よりお祝いを申し上げます。この東書教育賞も今回で23回を迎えています。過去にさかのぼって応募者数の推移を見てみますと、第1回の昭和60年度は160編でしたが、その後毎回応募数を伸ばし、平成17年度は287編、18年度は270編、そして今回が294編となっております。このように多数のご応募をいただくまでになったことは、「東書教育賞」と小中学校全校に配付する「入賞論文集」が先生方に浸透し、教育実践にご活用いただいている結果と考え、大変感慨深いものがあります。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。授業が習得から活用へと大きく転換しておりますが、学力の問題は到達度ではなく学習意欲にあります。子どもたちが生き生きと学ぶことができるためには、教師に何ができるか、それが問われています。これを正面から取り上げたテーマでございました。

毎回この席でお話しておりますが、審査の基準として共通に重視いたしましたのは、次の3点であります。

第一に、実践性の観点です。実践の結果に

基づいて具体的に記述され、論じられているか。これは当然のことと思われるかもしれませんが、中にはこれを感じ取れない論文もあります。別の言葉で言えば単に理論や概念が述べられている、しかもその言葉はどこかでみたような言葉ばかり並べられているというものが結構多いのです。私たちは、論文の中に先生方と子どもたちとの関わりや姿、子どもたちの変容が具体的に記述されているかどうかということを、非常に重要なポイントとして毎回審査にあたっております。

第二に、創意工夫という観点です。子どもが生き生きと学ぶことができるために、どのような工夫がなされているかということです。

第三に、一般性があるかという観点です。特別な実践ではなく、誰にでも応用できるかどうか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか。あまりに特別な条件の下でしかできない実践は評価できないということです。

私どもは常にこの3点を意識しながら審査をしておりますが、これは口で言うほど易しいことではありません。特に創意性と一般性の二つは、時に矛盾いたします。創意性があるからこそ一般性が薄い、ということはある得るわけです。逆もまた真でありまして、この点は毎回審査会で論議になります。

その他、論文として体裁や、テーマと内容が一致しているかどうか。理解しやすく表現されているか。これまでの発表の状況、字数の制限などにももちろん留意して、慎重な審査をいたしました。

では、A部門の小学校について申し上げます。小学校の部には175編の応募がございました。この中から、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞4編の計7編を選定いたしました。

最優秀賞には、兵庫県るさやま篠山市立おおやま大山小学校の酒井達哉先生の「地域を愛する心を育み、自信や良さの伸長を図る魅力ある授業作り」が選ばれました。

この実践は地域の特色を生かした総合的な学

習のカリキュラムを工夫して構成、実施することで、児童の自信や良さの伸長を図ることをねらっています。

児童は地域の自然を守るため、公共施設に地域住民を招いて「大山の自然環境フェスタ」を開催することを計画、それを目標に地域を学びの場として多様な体験を積み重ね、友だちと協力し合い、フェスタを成功させました。目的意識を高め、意欲的に学習活動に取り組み、フェスタを成功させたいという真剣な子どもたちの姿がよく伝わってきます。計画が綿密であり、指導のねらいは能力面でも態度面でも適切に設定されています。5年生のみの計画ですが他への発展が期待できる優れた論文です。

優秀賞の一つには、山口県くだまつ下松市立くだまつ下松小学校の浅村芳枝先生の「社会の変化に主体的に対応できる子どもの育成をめざした家庭科」が選ばれました。

地球規模で起こっているさまざまな環境問題、急速な情報社会の発達などにより、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。この変化に対応できる力の育成が期待されています。自分の生活と世界や環境とのつながりを意識させることにより、地球社会の一員として正しく判断し、行動することのできる力を家庭科の学習を通して付けていくことができないかを考察、その力を付けることは家庭科だけでは難しいため、家庭科と総合的な学習の時間や他教科とを関連付けて実践したものです。家庭科の目標達成のため、社会、理科、総合等他教科の年間指導計画との関連を明確にして授業計画を立て実践しました。これこそ、生きる力が一人ひとりの児童に身についたことが確信できるすばらしい論文です。

もう一つの優秀賞には、鹿児島県鹿児島市立和田小学校の田邊源裕先生の『成りきり』社会科学学習のススメ』が選ばれました。

田邊先生の実践は、教科書や資料集などの「調べ学習」中心の授業では、子どもたちの意欲もトークダウンし、人々の思いや生き様にまで迫ることは難しい。そこで、かつお船や森林などの

「現場」に行かなくても、学校の範囲内で「現場」に近い状態にし、そこで「働く人」や「モノ」に成りきる擬似体験を行い学習効果を上げるというものです。社会科では、見学や体験を取り入れることは一般的ですが、本実践では一歩進めて、教室の中でできる擬似体験の場と手法を考え出して良い成果を上げています。体験を基盤体験と検証体験とに機能分類するなど極めてユニークな論文です。

次に、A部門の中学校について申し上げます。95編の応募がございました。この中から、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞4編の計7編を選定いたしました。

最優秀賞には、群馬県渋川市立ふるまき古巻中学校の鈴木幸枝先生ゆきえの「意欲的に課題解決に取り組む生徒の育成—マツ枯れ現象を題材に—」が選ばれました。

この実践は、地域の環境を見ると、あちこちでマツ枯れ現象が見られる。しかし、ほとんどの生徒はこれに気付いていなかったり、気付いていてもそれほど重要な問題とは捉えていない。この問題に視点をあて、第1学年の顕微鏡使用や植物のからだのつくりに関する学習後の発展学習として「マツの気孔を使っての空気の汚れ調べ」を導入したという内容のものです。マツ枯れという実際に見られる現象を学習材として見つけ出したことが大変すばらしいことです。先生自身の自然を大切に作る心、自然を見る目など、力量の大きさがよく分かる論文です。生徒の自然保護に対する行動が持続することを期待します。優秀賞の一つには、東京都三鷹市立第四中学校の赤荻千恵子副校長先生あかおぎの「読書会を活用して教育活動をつなげる—副校長の挑戦—」が選ばれました。

生徒が自発的に本を読み、読書は楽しいことだと実感できる土壌を作りたい。副校長という立場から、生徒、教職員や保護者・地域社会等、

学校の教育活動を構成している諸要素を活用するという視点でその方策を考えた実践です。副校長という立場だからできる働きかけを学校教育活動の一つとして位置づけ、教師との関連を図りつつ「読書会」を立ち上げ、広げ、充実させた実践は高く評価できます。副校長としての真剣な取り組みが関係者の意識を高め共に考える会へと発展させた功績は大きく今後の新たな展開に期待します。

もう1点の優秀賞は茨城県守谷市立けやき台中学校の中村進一先生の「学習意欲を喚起し持続させる総合的な学習の時間の授業と評価」が選ばれました。

この論文は、「総合的な学習の時間」において、学習意欲を喚起し持続させるための授業と評価に関するもので、特に、評価基準を生徒と教師が共有して評価できる授業、自己評価力を高めるための具体的手立てを研究したものです。総合的な学習に対する実践上の問題意識も適切であり、改善の方途としての意欲喚起と自己評価の手法も優れています。こうした確実な理論に立った実践は有意義であり、他の参考となる点も多い優れた論文です。

いずれの論文を拝見いたしましても、今、現場の先生方が、子どもたちにしっかりとした基礎的・基本的学力を身につけさせることに、いかに苦心なさっているかが分かります。他方、一人一人の先生が、第一線で子どもたちを前にして、いろいろと創意工夫をして、独自の指導技法を編み出しておられるということ、はっきりと読み取ることができました。

どうか、東書教育賞に応募されたこの経験をこれからも生かしていただき、日常の授業の中で、一人でも多くの子どもに、学ぶことの楽しさ・面白さを味わわせていただくことを期待いたします。これをもって審査概要の結びといたします。

第23回「東書教育賞」の審査を終えて



B部門審査委員長 坂元 昂先生

受賞された先生方、おめでとうございます。B部門のほうではA部門の評価の観点に加えて、ICTといえますか、情報通信技術メディアをいかに上手に活用されているかということと、そうしたテクノロジーがどのくらい広がるか、もっともっと広がっていくかということを加えて審査をさせていただいております。おかげさまで昨年はA部門に対する応募の比率が6%でしたが、今年は若干増えて8%になりました。大変喜んでおります。これからますますB部門の応募数が増えていくことを願っておりますし、そのように努力をしてみたいと考えているところです。今日を受賞にご参加された先生方、7名いらっしゃいますが、6名がA部門で、B部門はおひとかたです。ということで、例年のことですが、この1年間に起こったICTといえますか、情報通信技術の教育活用に関する世界の情勢といえますか、状況を簡単にご紹介させていただく、それを恒例としております。今年もちょっと短くしたいと思いますが、ご紹介させていただきたいと思います。

この1年間、私は10カ国ほどいろいろ回って見てまいりましたけれども、世界各国、アフリカにしても、南アメリカにしても、ICTを教育に利用するぞと一生懸命やっております。特にアフリカの場合はアフリカの教育大臣が集まってICTを中心テーマにした会議を開いて、去年が第1

回でしたが、頑張ろうとしている。そこにインドとか中国とか、もちろん宗主国のヨーロッパの国々が応援をしていく。応援があつて頑張っているという状況が見られます。

一方、先進国のほうでは、去年は韓国とかイギリスのご紹介をしたわけですが、やはりいろいろな条件整備、インフラ整備が充実してまいりまして、今やどのように効果的にそうした新しい技術を活用するのか、そのためのサービスをどうしたらいいかということに関心が集まってきております。特にこの1年、目立ったのはイギリスのカリキュラムオンラインや、韓国のEDUNETなどいろいろありますが、アメリカの動きが急激でした。

一部、例をご紹介申し上げますと、一つはペリゾン財団というものがあつて、そこでシンクフィニティという教材の無料配布サービスシステムを動かしています。この教材の中身がとてもすばらしい。ご存じの理科ですとAAAS、それから数学の場合ですとNCTM、経済の場合ですとNCTA、人文系だとスミソニアン、そうしたところの超一流の教育研究機関が用意する教材をネットワークに乗せて無料でサービスをするということで、現在5万5000点くらいの教材が入つておまして、非常によく使われるようになりました。双方向のアプローチもできます。いつでもどこでもどんな授業の体制も、家庭でも学校でも使えるということで、だいたい月平均300

万件くらいの利用状況になっているわけです。

もう一つだけ申し上げますと、ディスカバリーチャンネルがありますね。あそこにディスカバリーエデュケーションというファンデーションがあるんですが、そこがユナイテッドストーリーミングというシステムを動かしております。先ほどのものもそうですが、これも連邦政府の標準カリキュラムとか各州の標準カリキュラムに準拠しています。だから使いやすいということがあります。カリキュラム準拠で、そして教材が、これも5万点くらい、そのうちの5000点はビデオ教材、そのほかはビデオクリップのようなものを用意して、ブログを付けてインタラクティブにサービスをするということをやっているわけです。ビデオ・オンデマンドになりますが、非常によく使われておりまして、現在100万人の先生が使い、3000万人の子どもが活用していて、効果も上がっているということです。ただ、これは有料です。小学校で年間1500ドル、安いですね。高等学校で2000ドルという値段ですので急激に使われた。この1年の間です。そのほかにTeacher Tubeであるとか、いろいろなLearning.comとか、いっぱいそういう教材をオンラインでサービスする。そのなかに教員研修に使えるものも出てきているというのが新しい動きです。

イギリスは前回ご紹介したのですが、特にブレア政権からブラウン政権に代わり、同じ党の移行ですけれども、ものすごい勢いで教育に対する考え方が変化しております。これはご案内のとおりです。まず教育技能省という省だったものが、これがなくなりまして、なんと、「子ども・学校・家庭省」になりました。それと「革新・大学・技能省」という高等教育、生涯教育関係の省になりました。このように分かれています。

私たちの関心があるDCSFという新しいお役所ですが、そこはそれまでが学校教育中心の教育技能省でしたから、子どもを扱うにしても、教育とか技能教育という学校教育という面から扱うのです。福祉、法律、犯罪、医療など子どもをめぐる社会の営みは山ほどあるわけです。そ

れがみんなばらばらであった。それを子ども・家庭というところに集中して、子どもを中心に、あらゆる角度から子どもを中心にした教育をしましょう、育て方をしましょう、そして21世紀の子どもを育てようという方針に変わりました。

それを受けていろいろなQCA、BECTa、OFSTED、NCSL、TDAなど、そういう取り巻く政府の施策を推進していく機関が長を代えたり、その動きに応じるように、子どもを家庭と学校とでサポートして、丸ごとトータルな子ども、マスの子どもではなくて、一人ひとりの子どもを中心に育てていこう。そういう方向に調査活動とか、いろいろなところが変わってきている。

特にBECTaなどに政府が調査を依頼しました。BECTaというのは政府をサポートする調査系の機関ですが、その調査によると家庭にコンピュータを持っている子どもの学力成績はいいし、それから親が学校に参画する、そういうところで成績が上がっている。家庭と学校との連携が子どもを支えているというデータが出てきております。

そこでICTの出番がある。そして、ICTを使い、今度の9月からリアルタイムホームレポートシステムを全中学校から始めます。2012年には全小学校に広がります。全家庭からいつでもどこでも子どもの学力成績や出欠の状況、どんな行動をしていたとか、あらゆることがアクセスできるようになる。個人情報との関係でどうなるのかはらはらして見ているのですが、とにかくその勢いで、ワットと。新しい子ども・学校・家庭大臣のナイトさんというのが、そういう話をしました。そうやって体制がガーンと変わるんですね。日本ではちょっと考えられないくらい大きな変革です。実態はわかりません。お話でプランですから。でも、BECTaの所長さんやいろいろな方々のお話、TDAという先生を指導する養成機関の責任者の話を聞くと、やはりそちらへ動いています。そういうような状況が新たに生まれてきております。

またICTを重視しなければいけないというこ

とが、インタラクティブ・ホワイトボードと英国で言いますが、日本では電子情報ボードですか、それとかモバイルだとか、そういう新しいテクノロジー、そういうものを使うとか。ゲームが出てきたので、悪影響もあるけれども、それを上手に教育に使うということ、イギリス政府がここ1年くらい急激に力を入れ始めてきている。日本もそれなりに頑張っています。校務を一生懸命やらなければいけないとか、教育CIOとか、そういうものでICTを上手に使う。いろいろな政策が出てきているわけで、我々は大変楽しみにしているわけです。

さて、本題に帰しまして、今年は大変うれしいことですが、5年ぶりに最優秀賞が出ました。今日、おいでくださっております茨城県の日立市立中里中学校の大地斉校長先生が技術家庭科で「子どもたちの学習の振り返りから授業改善への研究-10年の歩み-」という、10年の努力の積み上げで、とてもすばらしい研究です。子ども自身の学習を自己評価する。先生は自分の授業診断をして、それに基づいて授業、学習を改善する。我々の行動のフィードバック効果を大変上手に持って、それをサポートするためにコンピュータといいますか、ソフトウェア・ネットワークシステムをご自身を中心にしたお仲間が開発して、10年改善を重ねてすばらしい効果を上げられたという実践です。

おひとただけで、しかも5年ぶりの最優秀賞ですので、ちょっと中身を紹介させていただきますと、中学校の子どもたちが学ぶ情報とコンピュータという技術家庭科の必修部門の教育がございますが、PCを使って学習するわけです。この前の授業どうだったかというのがわかるという。コンピュータがこれだけあるのだから、コンピュータを使って自己評価することはできないのかと子どもが言ったことを、大地先生がつかまえて、10年前7人の仲間を集め情報教育研究会を作られました。

そのなかのテーマの一つとしてコンピュータ・デ

ジタルポートフォリオを活用する自己評価、2年間かけてフロッピーベースのソフトを使って、とにかく自己評価の効果を調べようということ、実践された。子どものほうはおもしろい、もっと続けたい。先生のほうは子どもを指導しやすい、一人ひとりの様子がわかるということで、明らかに授業に対する意欲が増し、学習が改善された。

しかし、フロッピーですからセットや使い方が時間がかかってしょうがない。それでネットワーク化しようということで、お仲間たちが1年かけて自己評価のソフト開発をされた。対象としていわゆる知識技能型の学力ではなくて、A部門でも今回、学習意欲であるとか、授業意欲、自信、よさ、期待、いろいろ出ておりますね。そちらの面、つまり興味、関心、意欲、態度、創意工夫といったようなものを自己評価して、前の授業の振り返り、次の授業での目標を設定し、それを伸ばしていくというようなやり方をする。そのときに子どもの感想も付け加える。そうすると、子どもは授業時間が来ますと、前の時間を振り返ってこのように自己評価していた。では、今回このように勉強しましょう。小単元ごとの自己評価もできますので、それも参考にするとということで、いよいよ2年間の先行実践をなされた。その先行実践の結果、いい結果が得られたので、今度は14校、その研究校以外の学校へ広げて幅広い取り組みをする。さらに自己評価システムに先生のアドバイスを付け加えるようにしたり、先生のほうから見るとクラス全体の動きが診断できてとてもよくわかるということになりました。

さらに進みまして、ネットワーク型の自己評価ソフトを完成されました。それは一つは学習の振り返りを洗練させていくのですが、もう一つ、授業改善診断システムをお作りになる。さらにBBSを通して子どもと先生、子ども同士のやりとり、感想が出てくるようになった。ただし、そのときに自分の成績を人に知られるのはいやだなという子どもが出てくる。そうすると、これはきちっとセキュリティを考えて、パスワードをつくり、情報管理に対する能力、気づきも子どもたちが

高めていく。こういうすばらしい展開がある。しかも、きちっと満足度などを評価される。その評価の結果をどのように使ったかということまで付けたすばらしい報告をいただいて、これはもう最優秀賞だということを決めさせていただきました。

要するに10年間の共同研究である。生徒と先生、先生たち同士、その共同研究であるという点、それから学習の振り返り、授業診断によるフィードバック。そういうフィードバックを支援するシステムを自ら仲間が開発され、そして授業を実践され、その診断に基づいて学習を改善し、授業を改善されたという点、しかもBBSのようなコミュニケーションのシステムを取り入れて、先生と生徒、生徒同士のコミュニケーションをサポートした。さらに情報管理の面から、情報モラルに関係しますが、個人情報尊重するということの成果が得られるということで、高く評価をさせていただいたわけです。

A部門とB部門との関係ですが、今のものが授業の振り返りや授業の診断という、先生がいい授業をすることが大切です。子どもたちがすぐれた学習をするための支援機構、ICTを使うのはその支援である。そちらだけ一生懸命やって、肝心の授業そのものがだめなら、いくらサポートシステムがよくてもだめなのです。ということは、A部門の先生のすばらしい実践、今日も授業と評価というものがあります。そういうすばらしい実践をこのICTなどを使ってサポートするというようなときに、さらに大きな効果が出てくるのではないかと。A部門で賞をお取りになった方々が次回にはB部門でICTを使って、もっと効果を上げたぞというようなかたちでのご応募などをしていただいたり、幅広いいろいろな方々がICTを使って、今やっている自分の授業をよくした、この処理が効率化して、そのおかげでこれだけ生徒をとらえる目が育った、授業がよくなった、そんな報告が次々と出てくるとうれしそうに思っております。

B部門の講評と感想を述べさせていただきました。どうもおめでとうございました。

審査委員の 講評・所感



小野具彦先生

受賞された先生方、大変おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。先ほどの社長からのお話にもありましたように、教育改革に向けて昨年11月に中央教育審議会の教育課程部会からこれまでの審議のまとめが出されました。その後、全国の先生方一人ひとりに生きる力という8ページのパンフレットが渡されました。こうしたことは遠山文部科学大臣が「学びのすすめ」というパンフレットを出したとき以来のことです。ということは教育改革に向けて教育関係者の並々ならぬ決意が込められているということだと私は受け止めています。

3月には新しい学習指導要領が示されますが、その中身はこのパンフレットの表紙にあるように、「理念は変わりません。学習指導要領が変わります」と二行で示されていました。そのとおり、その内容が示されるのだと思います。そうしたなかで理数教育の充実も改善事項の一つです。そして理科、数学とも時数の増加が図られます。もとより、理科では身近な自然や事象にかかわる学習の実践が強調されてきましたけれども、さらに科学への関心を高め、科学の方法を学び、科学の有用性を実感させるなどが強調されています。

そうした意味で、中学校の最優秀賞を得られた群馬の鈴木幸枝先生の実践報告はきわめて今日的な課題である環境教育の視点に立って身近な地域のマツ枯れの現象を取り上げ、その解決

を考えていくという課題解決の視点に立っているという点で、きわめてすぐれた実践だと思いました。単元の構造が大変明確で、指導計画が大変しっかりしていました。ぜひ、ほかの単元についても意欲的に取り組まれることを期待したいと思っています。

教育改革の視点のなかで通して言われている一つに、コミュニケーション能力の育成があります。また表現力の向上も重要な視点として取り上げられています。言うまでもないことですが、不足しがちな直接体験を補うには読書体験の効果は絶大であります。そういう意味で読書のすすめということが、今後、小中学校、あるいは高校、大人にとっても課題であると思っています。

そういう意味で優秀賞を得られた東京の赤荻千恵子先生の実践、副校長という立場はきわめて多忙な立場です。そういうなかで生徒、教員、保護者、地域を巻き込んで読書会の設置を働きかけ、その実施と内容に多大な努力をされたことに深く敬意を表したいと思います。

もう一つの優秀賞を得られた茨城の中村進一先生の実践、これも今日的な課題、総合的な学習の時間の充実ということに関連しています。残念ながらご案内のとおり、今時の改訂でこの時間の削減が確実になっています。しかし、全国の学校では知恵を集めて、その充実にエネルギーを費やしてきたところであり、積み重ねてきた試行錯誤の成果が実りつつあると私は受け止めています。総合的な学習の時間を実践するうえでの課題を踏まえて、改善の方策として生徒の意欲を喚起し、目当てを明確に持たせたということ、それを教師と共有する視点に立っているということ、素晴らしい実践だったと思っています。

以上、私は中学校教育に関わってきましたので、中学校の実践について短評を加えさせていただきました。受賞された皆さんのさらなる充実と発展を祈念申し上げまして終わりにいたします。



受賞された先生方、おめでとうございます。今回読ませていただいて、また受賞された先生のものを見させていただいて、教科が孤立するのではなく、お互いが関連する、子どもの生活と関連する、そういう教育を目指しているということ全体に僕は感じました。とてもいいことで、教科の内容をただ伝達すれば、それで終わる。効果的に伝達することが教育ではなく、子どもの生活に結び付いて、お互いに関連させながら、それぞれの教科が生きるとするということが全体に行われていると感じました。とてもいいことだと思っています。それは総合的な学習のせいでもあるでしょうし、文部科学省が進めてきた生きる力ということも関係するかと思います。

それをどんどん進めていただくという意味で、受賞された先生方の論文はとてもすばらしい、皆さんに参考にさせていただきたいと思います。一方、PISAの調査であまり成績がよくなかった。僕は数学ですが、理科、数学にとってよかったなと思っています。PISAの調査で読解力、応用力ということが問題になって、その成績があまりよくなかったということで、PISA型の問題の開発がされつつあるような気がしますが、私はそうではなくて、読解力といったら国語とすぐなりませんが、読解力といっても、数学、理科も読解力の手段と考える。数学で自然現象、社会現象を見る、読解する。理科的な観点で社会現象、自然現象を解明する、読むことも大事ですし、そ

ういうものを読んだところから自分たちの生活をどう改善していくか、どう学んでいくかということも大切なことだと思っています。

そういう意味で、今回の受賞された先生方が読解力だから国語、応用力だからということではない形に進んでいるのがとても素晴らしいのではないかと。同時に、教育全体に起きてほしいことですが、理科、数学もそういう形で、数学、理科を学ぶときに、あるいはそれぞれの教科を学ぶときに、自分の生活と自分の生きることに関連があるなと感じるような教材研究をして、そういう教育が行われてほしい。

ともすると、指導法でこのような効果があった、うまく教わった、こういう評価をしたらうまくできた、そういうことだけではなくて、それも大事なだけけれども、学んでいるときに自分の生活とこう結び付いている、自分の生き方にこのように役立つということが感じられる教育実践がもっとも出てきていただけるとありがたいなと思っています。その参考として今回受賞された先生方の論文が生きていくのではないかと考えて大変期待しております。本当におめでとうございました。

審査委員の講評・所感



多湖 輝先生

どうも皆さん、今日はおめでとうございます。私も毎年小中学校の先生方の実践の論文を読ませていただいて、まだ日本の教育も本当にこういう先生方だったらまったく問題ないなと

いつも思うのですが、先生方、よくあの忙しいなかで論文をまとめられた、そういう意味では皆さん方は大変恵まれた方だと私は思っています。

今朝も産経新聞がかなり大きく取り上げておりましたけれども、杉並区の和田中学校が問題になっていますね。いろいろなことをやりました。藤原和博氏はリクルートという私企業からいきなり校長の公募で入ってきて、教育界とはいったい何だというわけで、全部彼はひっくり返すようなことをとにかくやり遂げた。今日、産経が一面で大きく取り上げていたのは、皆さんご存じだと思いますが、中学校の子どもたちに、特にできる子、吹きこぼれとか何とか言うようですが、できる子どもたちにさらに学校の教室のなかで塾の先生を呼んで授業をやる。これには学校は全然関わっていないのです。保護者がそのスペースを借りて、そしてできる子どもたちに塾の先生から授業を受けるという仕組みを作った。

これには東京都の教育委員会はかなり反対したようですが、先ほど伺っていたら、「おお、いいじゃない、やってみたら」という都知事の一言で急激に区の教育委員会も認めるところになった。これは実はいろいろな問題をはらんでいるのです。考えてみたら大変な問題が今教育の現場で起こっている。藤原さんのお書きになった本を、私はかなり一生懸命読みました。1994年くらいから書き始めて、去年の7月にお出しになった『校長先生になろう!』という本は大変衝撃的な本でして、だれでも校長先生になれる、そしてこれからは公立校の3分の1、30%はそういう私企業などの社会経験を豊富に持った方に、本当は校長というのは免許も何も要らないのです、だからそういう人が入って、そして冷静、客観的に今の教育の現状を見て、それを変革していく。それでなければ教育界の変革はあり得ないという主張ですが、もっともだということはおたくさんあります。

私はそれを読んでいて、非常にびっくりしたのは先生方があまりにも、いわゆるモンスターペアレントなどに悩まされ続けていらっしゃる。たと

えば夜中の2時、3時、明け方に平気で電話をかけてきてくだらないことの相談で延々と30分、40分と電話でしゃべりまくる。そういう問題は校長もみんな巻き添えを喰うわけです。

いちばん問題なのは都の教育委員会その他いろいろあるわけですが、そういう行政のさまざまな機関が議会、つまり区議会とか市町村議会とか、あるいは国会でもそうですが、その議員さんから問い詰められた場合の資料を要求してくる。あなたのところははじめはないのか。とにかく調査して報告しろ。そういうことを調査して報告して、それを教頭さんが全部引き受ける。滅茶苦茶な忙しさです。

先生方には私は教育をやってほしいのです。そうすれば、もう問題なく学力などつくるのです。そのつまらないことに振り回されるという、この仕組みをいったいどうやって変えていったらいいのか。私もまだ教育の現場にいますが、小学校校長などもやってみました。私は3ヶ月に1回くらいは私の元の同僚たちを集めて徹底的に議論する。昨日も東京都の中学校の校長先生を集めた会がありました。来週は小学校の校長先生を集めた会がある。そういうところでもっとも腹を割って徹底的に議論しなければいけないと思うのだけれども、なかなかそういう雰囲気にならないですね。中央教育審議会に出た先生、みんなそうですよね。みんなで侃々諤々と議論するというのではなくて、なんとなく黙っているうちにことが運んでいってしまう。こういう体質をなんとかしないと日本の教育界は根本から変わっていかないのではないかと。

私も非常にいろいろな意味での危機感を持っておりましたが、一つの問題点として、私はこの間、ちょっと検査入院してみたのですが、本当にびっくりしました。要するにマニュアル人間ばかりです。医師というのは人の命を預かっていますから、猛烈に世界中で行われる研究、業績、発表、それに注意していないと、お前、こんなことを知らないのかと言われてしまう。そうすると、どういうことになりますか。だんだん専門化

してくるのです。一般外科で済んだところが、脳外科、心臓外科、最近は血管外科とか、細部にわたって細分化して、そのことは専門家だけれども、トータルな人間を見られる人がいないのです。今、病院というのは聴診器一つ当てない。脈一つ見ない。顔色を見て診断するのではないのです。データだけです。データによって診断を下す。

末端の看護婦さんもすごいですよ。入った途端にちょっと私は手をいじる関係があったので、足にパチッと、絶対にこれを切らなければ退院できないというか、そういう足かせみたいなものをはめてしまうのです。そして、看護婦さんが入ってくると、「規定によりましてお名前をおっしゃってください」「多湖輝」「何歳でいらっしゃいますか。ああ、そうですか。ちょっと調べさせていただきます。ああ、多湖輝さん、間違いございませんね」。

本当に10分か15分ですよ。同じ看護婦さんが来て、「お名前は？」と聞く。「さっきあなた来たじゃないか」。私のことを覚えていない。「まあ、おっしゃってください、規定になっていますから」「多湖輝」「生年月日は？じゃあ、ちょっと拝見させていただきます」。こういう仕組みですよ。

一つ何か事故が起きると、いわゆるコンプライアンスだか何だか知らないけれども、法律というものができて、規制ができて、そしてこういう報告を求められる。その仕組みですね。これが猛烈な煩わしさを生んでいる。その状況はいったい誰がどうやって壊していくのか。まだ私が頑張ると、政治も行政も少し動かせるのではないかと、その辺りのちょうど中間にいるものですから、もうだめだなどという感じ、少なくとも私の生きているうちはちょっと無理かなという気持ちと、しかし何かやらなければいけないという気持ちがある。

余談になりましたけれども、先生方、そういうモンスターペアレントへの対応だとか、いろいろなことなかでよくこういうふうな立派な授業の研究を東書教育賞にお寄せいただいた。そのご努力は非常に驚くと同時に、これをもっともっと

広げていかなければいけないと痛感いたします。それには先生方が本当に勉強をし、研究ができる。そして生徒ときっちり向き合える、その環境をどうやって整備していくのか。そちらのほうにもっともっと我々は力を尽くしていかなければいけない。どうぞひとつ先生方、頑張ってください。どうもありがとうございます。



寺崎でございます。毎年この賞の評価をさせていただいて、そしてこの会に臨むときに毎年思うのですが、私は日本がいくつか誇れるものがありますが、日本の、特に小学校の先生方の力というか、授業を作っていく力というのは相当世界的に誇っていいものではないかと思っています。ご承知のように、日本の学校は画一化されている。それからあちこちで同じことが教えられている。教科書もまたどの教科書を見ても同じ。先生たちの教え方も40人の子どもに一齐に教えているというようなことが言われますね。ところがそうではないと思います。なぜか。私は歴史を研究してきたからです。

20世紀に入るあたりから、つまり明治30年代くらいから驚くべき程度の高い授業研究の本が出ております。それから教師論、これがものすごく水準の高いものが出ております。そういう水準の高いもの、蓄積のうえに戦後から60年も経ってしまったのですが今の教育があるのだと思

ます。たとえば子どもたちをどう理解するか、この場面でどういう教材を選ぶか、あるいはこの雰囲気の中かでどういう質問を子どもに投げかければよいか。発問の研究とか、教材研究とか、いろいろ言われる。そのような技術においては、やはり私は日本の先生方はおそらくほかの国の先生方にまったく劣らない、いや、もっと僕はすごいと思っています。

先生方のあの論文を読ませてもらうと、いつもそのことを感じます。確かなものがあると思います。この確かなものとは何か。それは教育実践なのです。実践があるということです。先生方はその実践を記録というかたちにおまとめになった。しかし他の先生方のものを見ておりますと、ときどき実在としての実践がそこにあるのに、それを言葉にし、文章にし、しかも我々のようにまったく関係ない、よく知らない人間が読んで納得でき、ときにはなるほどと心を打たれる、そういうものにまとめる力は、惜しいことに僕はやはり高くないと思います。

それはおそらくその部分は実践を形象化するといえますか、かたちのものにしていく能力のところ、先生方もやはり子どもたちと同じ悩みを持っていらっしゃると思います。そういう点で毎年これを読むたびに実践の水準の高さと、それからそれを形象化する力がだんだん少しずつ頼りなくなっているという印象を強く持ちました。そのことに交互に襲われるのが年末から年始にかけてでございます。

先生方、本当におめでとうございました。両方のお力を持っていらっしゃるということがよくわかりました。今日はおそらく披露宴以来、みんなからほめられるときですから、ぜひ楽しんでください。



皆様、おめでとうございます。私は今年から初めて審査に加わらせていただきました。それで、実践論文をたくさん読みまして、特に受賞なさった先生方の論文に感心しました。それは私が考えてもいなかったことなのですが、ご自分の授業、あるいは教科だけではなく、いろいろな意味でつながりを踏まえていらっしゃる。たとえば他教科とのつながりであるとか、地域とのつながり、広い意味で社会、あるいは環境を念頭にに入れての社会とのつながりというように、かなり広い視点から、しかし着実に自分の生徒たちを見つめながら実践を行っていらっしゃるという、この日々の積み重ねについて大変感銘を受けました。

欲を言うならば、来年度に向けて今度は縦のつながりといいますか、今年もないわけではなかったのですが、もう少し数が増えてほしいなと思いましたのは、小学校から中学校への連結という意味でのつながり。そして、今度は高校へ向けてのつながりというような、その辺りができたらほしいなという欲張りなことを考えました。

それと同時に、話は飛びますけれども、中教審ではなく文部科学省の副大臣の肝いりで始まった子どもを守り育てる体制のための懇談会が文科省にございまして、昨年の秋から急に急ピッチでやっているものなのです。それはどういうことかといいますと、昨今の特に小学校、中学校で子どもたちの間にインターネットとか携帯、

これは各国にない現象として子どもたちがもはや携帯との生活からは切り離せない状態にある、それがいかに学校現場に入りこんできているかということから、具体的にはそれをどうするかということ、こういうなかで先生方がこれまでとはまた違った観点で授業を作っていかなければいけないということの大変さを思いやる。それと同時に、そこで非常に専門家から指摘されているのは、最近言葉を使って人間関係を構築することができない子どもが増えている。それが大変不得手であるという指摘がございました。

これは大変に深刻なことだと思いました。言葉というのは先ほどコミュニケーションの問題も出ましたけれども、言葉、コミュニケーションというのはおそらく全教科を通して必要なものであって、しかも人間の根幹をつくるものであるということをお考えますと、やはりすべての教科において小学校、中学校を通して言葉でものを考え、言葉で人と関係を作っていく、言葉で社会とつながっていくことのできる子どもたち、生徒をどのように育てていくかという、たぶんこれまでになかった難しい面も出てくるかと思えます。今年、読ませていただいた論文のレベルから考えると、来年はまたきつとすばらしい成果が出るだろうと期待しております。先生方の日々のご努力に対して心から敬意を表します。今日は本当におめでとうございます。

審査委員の講評・所感



三上裕三先生

東書教育賞を受賞になりました先生方、本日はまことにおめでとうございます。私は小学校のA部門を中心に感想を述べさせていただきたいと思います。まず小学校の応募総数が今年度、大幅に増加しております。これは大変喜ばしい限りだと思います。これも東書教育賞が全国的に非常に高い関心を持たれて、そしてまた各学校で現在、大変な課題になっております学力向上を目指して授業改善が非常に実践的に、また研究的に進められている。そのことを物語っているのではないかと思います。

応募された論文を教科別に見ますと、主要教科である国語、社会、算数、理科、これは昨年よりも大幅に増えております。これは今年の特徴的なことではないかと思っております。また小学校における基礎、基本となる主要教科の研究実践の重要性がいっそうまた認識されている、その証拠ではないかと思っております。さらに総合的な学習、特別活動、これはそれぞれまた増加しております。これも教科以外の領域も、また新たな視点で見直されてきている、その表れではないかと思っております。

さて、最優秀賞を受賞された兵庫県篠山市立大山小学校の酒井達哉先生、このたびはおめでとうございます。全校児童70名の小規模校にあって先生は子どもたちに生まれ育った地域を愛する心を育て、自分に自信を持てるようにするため、総合的な学習を核にした実践を重ねてこら

れました。最近の子どもは自然環境に恵まれた地域にあっても、地域とのつながりや、自然への関心が薄いと言われております。先生は子どもにつけたい力として、地域や人と関わる力、二つ目に自分の思いを人に伝える力、三つ目として自分に自信を持つこと、この三つを設定されて、道德との関連で郷土愛を育み、希少価値のある動植物の栽培を通じた感動体験、行政と連携して進めたビオトーププロジェクト、国語科との関連による表現活動の学習等を総合した発表会である環境フェスタ、これが地域保護者に大変大きな感動を与えました。これはまさに総合的な学習の本来の趣旨を生かした実践的で体験的な活動であり、他の教科、領域の学習が生かされたすばらしい実践であると思います。

次に優秀賞を受賞された山口県下松市立下松小学校の浅村芳枝先生です。浅村先生は家庭科と総合的な学習や社会科とを関連させながら、身近な生活環境を見直すことから地球全体のことを考えて判断し、行動する力を育てようと実践されたものです。先生の視野の広さによってこのように豊かな学習が展開できることを示していたすぐれた実践であると思います。

続いて田邊先生は昨年も最優秀賞を受賞されています。昨年に続いての受賞となります。昨年は歴史にどっぷり浸からせる授業、今年は『『成りきり』社会科学習のススメ』です。先生はいつも子どもたちに本物に触れさせ、そのときの感覚を大事にしたい、実地体験を通して五感で感じ取ってほしいと常に考えておられ、地域、保護者、教育関連施設やさまざまな人々との関わりやネットワークを大切にしておられます。先生の研ぎ澄まされた感覚とありきたりの授業に満足しない執着心に敬服いたします。

次に奨励賞を受賞された4名の先生方のなかで学校経営の立場から受賞された刈谷市立富士松南小学校の杉浦渉校長先生です。テーマは「教師の学びを高め、子どもの学びを伸張させる学校づくり」、これは今学校に求められている重要な課題であり、教師集団の高まりが、子どもの

学びを高める学校経営を着実に実践された校長としてのリーダーシップに敬服いたします。来年度、さらに多くの論文が応募されることを期待しまして感想といたします。おめでとうございます。

審査委員の講評・所感



赤堀侃司先生

私はB部門の担当であります。B部門はメディアのほうなのですが、坂元先生がおっしゃったように、我々はこの論文を見たときに、大地先生の論文はもう即、最優秀賞だと決めさせていただきました。その理由は、私の印象だと、とにかく一生懸命ずっとやってこられたという気持ちだろうと思います。ITの活用というはあるのでしようけれども、やはり教育にかける情熱といえますか、そういうものを非常に印象深く思わせていただきました。

私は今、先ほど学力の問題が出ておりましたけれども、PISAの分析をちょっとやっております。フィンランドにまいりまして、ITをどのくらい使っているのかといろいろなインタビューもしたり、いろいろなこともやってきました。学力とどう関係があるのかと聞きましたら、やっぱりITというのは道具だから、あまり学力としては考えておりませんという答えが出てきて、そうだろうと思います。

PISAの分析結果を見ると、フィンランドという国はITをものすごく使っています。トップクラスです。ただ、ITは前面に出ておりません。実

際に行くと、ITはいろいろな教室に全部入っているのですが、IT、ITと言っていないのは、多分指導力だとかそういうところに重点を置いているからだろうと思います。そういう点で私はB部門の編数は少ないと思いますが、道具はあまり前面に出てこなくてもいいのではないかな。だんだん透明になってきますので、現実には我々はインターネットをどんどん使っていますし、いろいろなものを使ってやっているわけで、そういうものが前面に出てくるよりも、やはり教育といえますか、指導といえますか、愛情といえますか、そういうものがもっともっと前面に出てくる実践であってほしいと思っています。

先ほど多湖先生も和田中学校のことをおっしゃいましたけれども、実は私も和田中の藤原先生と一緒に共同研究をやっております、土曜日に子どもたちが来るのです。午前中来ておまして、私がやっているのは小学6年生が春休み、1月、2月、3月くらいに事前に適應するために来るので昨年やりまして、今年もやっているのです。そのときに任天堂のDSを使って学力が伸びるかという研究を一緒にやっています。私のところの学生もちょっと入り込んでやっております、今年分析しますと、確実に伸びているのです。

その理由はDSだからではないだろうと思います。ボランティアで大学生や大学院生のいろいろな人が入って、子どもと接していく、そのことがたぶん学力を高めているのではないだろうかと私は思っています。そういうことで、いいかわかりません。細かいことは私はわかりませんが、少なくとも学力だとか、学校だとかいろいろなところで言われているなかで、何かしたいという気持ちが私はあるだろうと思って、実際にいろいろ分析しておりますと、その2ヶ月か3ヶ月の週1回の経験が中学校に入って非常に学力を伸ばしているということもデータとして出ております。そういうことで我々はITを道具として使いながら学力やいろいろな適應やそういうところに役立てていきたいと思っております。そんな研究をやりたいなと思っています。

今回の大地先生の実践論文はまさにそのことを我々に教えてくれたような気がいたしまして、大変感銘を受けて3人一同、即、最優秀賞に決めさせていただいたという経過を報告させていただきます。ありがとうございました。おめでとうございます。



受賞された先生方、本当におめでとうございます。私の知人がかつてこの賞をいただきまして、それも一つの区切りであったとは思いますが、さらにそのあと一生懸命されて、そしてその先生がされていたこと、こちらで賞をいただいたということがもたになって周りの方々注目されて、そして広がっていている。そういう核になられて、今までもすでになられていらっしゃると思いますけれども、さらにそれが大きく水面が広がっていく、今日は一つのまた記念すべき日になるのではないかと、期待申し上げています。

坂元先生が詳しくご解説くださいましたが、大地先生のお仕事は私の専門と非常に近いところなので、そのような立場からちょっと感想を述べさせていただきますと、ICTの活用は今すごく盛んになってきております。そして、また先生方にご負担をかけてはいけないということから、比較的すぐ入れるようなもの、たとえばデジタルカメラを使うとか、インターネットでいろいろなすぐれた情報、役立つ情報を使うというような試みは

数多くございまして、だんだん日常化してきているかと思います。大地先生のすぐれたところはおそらく日常のなかではデジカメが使われたり、いろいろ世の中で流行っていることもされてはいると思いますけれども、今回おまとめいただいたものについては、比較的最小限が目向けない、ICTに関心のある人でもあまり目向けない大変地味なところですよ。

それから、文部科学省のほうから昨年3月に出てまいりました教員のICT活用指導力の項目を見たときに、大地先生のこのお仕事はどこに入るのかなと探してみると、いくつもに入る、当てはまるかなと思うと、入るところが、正直申し上げてズバリはないのです。あえて探すとA、B、C、D、Eと五つに分かれています、Aのなかの1項目とちょっと関係があるという具合です。つまり比較的飛びつきやすいところではなく、ずっとこの仕事をなされてきた、地味でありみんなの目向けないところをされてきたというのは、坂元先生のお話にもございましたように、大地先生のお仲間の皆様方が子どもさんの姿からスタートされている、だからICTの流行りが変わっていても、自分たちはこのことをやるのだというものが10年続いたという、その辺りが大変すばらしいなと思いました。

国際的にも10年くらい前にポートフォリオを生徒とつくっていきながら、それを改善するということはまだあまり知られていないことで、日本の学会でもほとんどそういう発表はございませんでした。そのころから、もうそれを先見の明があっでられていらした。今でこそポートフォリオという言葉が日本に広がってきましたし、ティーチング・ポートフォリオなどは特に授業改善につながるということで、だんだん一般化されてきましたが、それを先生方のお仲間10年も前からずっとなされてこられたということに大変感動を受けました。

今年度初めて、私はこの場にいらさせていただきました。審査というものを初めて体験させていただきました。どのようなものか想像もせず

にここに座らせていただいたのですが、皆さん方のお話を聞かせていただきながら思ったことは、早くこのB部門がなくならないかなという思いです。坂元先生の話をはじめB部門に関する話を先生方がされたときに、A部門の方がうなずいていらっしゃるのです。よく考えてみれば、B部門があるということは不自然なことで、AのなかにBの内容が含まれるものが今後いっぱい出てくるということが本来の姿ではないかと思います。

しかし、現実を見ますと、今日もお席の隣が寂しいですね。最優秀賞のお隣がいらっしゃいません。まだまだB部門の必要性は大切だろうと思うわけです。ぜひA部門の方々が地元といいますか、学校にお戻りになられましたら、ご自身でももちろん結構ですし、お仲間の方にBのほうで出してみよう。おれと一緒にまた出そうというようにお誘いいただきたいと思います。10年やらなくても、1年のすばらしい試みであっても最優秀賞は出るだろうと思います。

東書教育賞というものの存在の偉大さ、価値、日本にとって大変ありがたいことをやっていただいているということを実感させていただいたというのが、私は今日ここに初めていさせていただいた喜びでございます。この賞をやっていただいている多くの方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

あ と が き

財団法人中央教育研究所
所長 水沼文平

中央教育研究所は、昭和21(1946)年7月、民間の教育研究機関として設立されました。戦後の教育再建の重要性にかんがみ、広く内外における教育の組織・内容・方法等について、基本的・実証的な調査研究を行うことによって、教育科学の推進、教育現場の発展、文教政策の確立に寄与することを目的としています。

当研究所は、東京書籍から委託を受けまして、1984年にスタートしました東書教育賞の第1回目から論文の審査を行っております。

さて、今年の応募状況ですが、応募数も年を重ねるごとに増加しておりまして、今回は294編の応募がございました。部門別には、A部門の「教科指導・学校経営部門」が270編、B部門の「情報通信メディア活用部門」が24編がございました。B部門は昨年より9編増えておりますがまだまだ少ないのが現状でございます。現場ではB部門に関する論文作成の不慣れなこともあるようですので来年度からは「実践論文の書き方」に関するガイダンスを応募要項に付記したいと考えております。

今回の応募論文の特徴としまして、教科や総合とか経営といった領域には取まらない教科横断的な課題や小中高校の関連といったものが増え、また従来はあまり見られなかった教育行政関係者の応募が出てきております。これは教育の大きな変換期を迎えていること、東書教育賞が行政の方々も含めた教育界に歓迎されていることの現れであると喜んでおります。

審査は、従来どおり一次審査と最終審査の二段階で行いました。まず、一次審査は、東京教育研究所の主任研究員の先生方を始め教職経験の豊かな先生方、大学の先生方に教科・領域毎にご検討を頂き、A部門では20編、B部門では6編を選定いたしました。最終審査では審査員の先生方全員で1編ずつ丁寧に評価をしていただきました。このような経緯を経て、最優秀賞3編、優秀賞4編、奨励賞10編を選定いたしました。

応募原稿の作成につきましては、論文の分量を12,000字以内で、まとめていただくことをお願いしておりますが、一次審査で高い評価を得られた論文の中には、この枠をかなり越えて、選定できなかったものもございました。次回からのご応募の際には、この点に是非、ご留意いただくことをお願い申し上げます。